

文化・芸術

《名画の扉》

大川美術館特集展示
「シュルレアリスムの時代」から

近代洋画の青春期といわれる大正時代にさっそうと画壇に現れ、わずか10年ほどの画業を疾風のごとく駆け抜けた夭折(ようせつ)の画家、三岸好太郎。最新の西洋美術を取り入れ、目まぐるしく作風を変化させていきましたが、特にフランスで始まった芸術運動、シュルレアリスムの感化をうかがわせる「蝶と貝殻」の連作は、三岸の天性のロマンチズムや先鋭的な感覚が最もよく表れた代表作といえるでしょう。

この連作では、油彩

三岸好太郎 (1903~34年)

「筆彩素描集『蝶と貝殻』から
『海洋を渡る蝶』」

1934年、プリント、手彩色
紙 30・0センチ×22・4センチ

